

桂男

西巷説
NISHI NO KOSETSU-HYAKUMONOGATARI
百物語



◎桂男

月をながく見いり居れば
桂おとこのまねきて
命らぶむるよし
むかしよりいひつたふ

——繪本百物語・桃山人夜話卷第五／第四十二

壺

月い眺めとつたらあきまへんど帳屋の林蔵は言った。
何でやと問う。

その問い懸けの抑揚がどうにも上方風でなく、急に拵えたような不自然な尋ねようになつてしまつたから、剛右衛門は何だか気恥ずかしくなつた。

上方での暮らしも今年で二十五年になる。上方訛りは身に染みている。だから取り立ててそうしようと思わなくとも、ごく自然に口を突いて出る。独り言などみな上方風である。それなのに意識した途端、嘘臭くなる。真似でもしているようになる。剛右衛門はそれが嫌だ。

何故月を見てはいけませんかなと、再度問うた。
照れ隠しに江戸の訛りに近づけようとしてみたのだが、却つて上方者が無理に江戸弁を使っているような具合になつた。妙なものである。

持つてかれる謂いまっせ、と林蔵は言った。

「持つてかれるて、何を」

「さあ何でつしやるかな」

林蔵は困つたように笑う。
佳い男である。

容姿のことではない。勿論、見た目もさっぱりと垢抜けているし、顔つきも整っている。切れ長の吊眼はどこか高貴な様子だし、鼻筋もすつと通っていて、薄い唇は男のくせに朱く、白い顔に妙に映えている。噂では言い寄つて来る女は相当に多いらしい。それなのに、この優男はどうにも女につれないという。羽振りが悪い訳でもなく男振りも好いのにな女気を嫌う、身持ちが堅いからといって所帯を持つている訳でもない。嫁を娶る気配もない。だから中には陰間ではないかと悪口を謂う者もいるが、それはやつかみというものである。

勿論、剛右衛門にも男色の気はない。

剛右衛門は林蔵の人を買っている。否、正直に言うならその商売の手腕を買っている。

林蔵は天王寺で帳屋を営む男である。

帳屋というのは紙に帳面、筆一式、そうした書き物道具全般を扱う商いで、普通は店先に笹竹を立てて目印とする。ところが林蔵の店は竹の先に櫓が括られている。店の看板には帳屋林蔵としか書かれていないけれども、巷では櫓屋と呼ばれているらしい。

最初は、ただ帳面を仕入れていた。

櫓屋の大福帳はげんが良いと、誰かに聞いたのだ。

誰だつたらうか。それより、何を契機にしてこのように親しくなったのだったか。

お月はんにはほれ、隈がありまっしゃろ、と林蔵は続けた。

「あれが、男だんねん」

「男て、あれ兎と違いまん」

「兎て」

餅搗いてるゆう話でつかと言いつら、林蔵は剛右衛門の隣まで歩を進め、手摺りに両の手を掛けた。

剛右衛門の奥屋敷に設えられた物見台である。この界限では一番高所にあり、一番見晴らしが良い。とはいふものの、街中であるし、絶景という訳には行かぬ。火の見櫓に上つたようなもので、見渡しても見通しても目に入る景色は街並みだけである。それでも天に近いことは間違いない、月見星見には丁度良いということで、何とはなしに向月台と呼んでいる。

慈照寺の庭にある向月台とは何の関わりもない。

兎には見えまへんでと林蔵は言う。

「杵エ持つてるんでつか」

「そう謂うやる。まあ、何処が頭で何が杵やら、儂にもよう判ちんのやけども、そう言われて見れば長い耳があるようにも思えるやないか。兎の餅搗きや。童の時分に聞いたで」

「私は蛙やと教えられましたで。あれは臺が跳ねておるんやと——まあどれも擬えやね」

「そやなあ」

あんな所にそないなもんが居る訳ないわ、と剛右衛門が言うと、旦那はん月がどないな場所か知つてはるみたいやでと言つて林蔵は笑つた。

「あんな所でどんな所でんねん」

「サテでないな所なんやろな。そもそも、あれは球なんやろね」

「まあどっから見ても円く見えますよって、球なんでっしやるな」

「しっかし繁繁と見とると不思議なもんやなあ、月ゆうのんは。あの模様かて、あれ、どないになってますのやる。そもそもお月はんゆうのは、この地べたからのくらしい離れておるのやろね」

遠いことだけは確實でっせと言つて林蔵は剛右衛門の方に顔を向けた。

「遠いか」

「せやから旦那はん、そないに見詰めてはあかん言うてまつしやる。俗信ゆうたかて唐土渡りの筋金入りや、あんまりださくさしたらあきまへんがな」

「さよか」

剛右衛門は太陰から視軸を離れた。

凝視しているとこのまま魅入られてしまうような気もしたのである。眼が滲むのか、光が暈けるのか、月輪が蠢いたようにも思えた。

錯覚だろ。

あれは林さん、ぼつかり浮かんでおるのやるなアと、剛右衛門はまるで児童のようなことを問うた。

浮かんでまんないア、と林蔵は答える。

「遠くに遠くに浮かんでますわ。いや、この大坂からもあないして見える、唐土からも鞆鞆からも同じように見えるんやから、こら相当に遠いことになりまつせ。江戸大坂より離れてまつしやるな。いや、長崎か蝦夷か、もつと離れてますわ。鳶か鷹かて月までは飛ばまへん。大筒ウ撃つたかて届きまへんで」

「そら届かんで」

剛右衛門は大いに笑った。

「お月はん撃ち落としたなんちゆう話は、法螺にしても耳にせんわい。落とさんまでも弾が届くんやつたら、孔のひとつも開いてますやる」

まったくやねえと林蔵は答えた。

「そんだけ遠くてあの大きさでっせ、旦那はん。ありや、相当に巨けなものや。その巨けな月に、あの隈ア、こうでかどかと映つてる訳ですわ。あれが兎だ蛙だゆうのやつたら、そら大層にでかいもんでっせ。この国の端から端まであるような、そら大変な化け兎や」

そやろなあとお剛右衛門はもう一度天を仰いだ。
勿論、本気で兎が居ると思つたことなどただの一度もないのである。ないのだけれど、別にそんなことを真面目に考えたこともなかったのだ。

別に兎には見えなかつた。沁みのようなものである。

蛙として見たところで、能く解らない。

「あの模様は——何なのやるね」

「せやから、あれはまあ、山の影か、谷の凹みか、そんなようなもんでっせ。まあ、球の表面の凸凹ですわ」

まあ、そうなのだろう。でも。

「最前、男だとゆうたで」

「へえ。あの模様が男なんか、彼処に男が居るゆうことなんか、其処んとは判らへんのやけども、あのな——旦那はん。お月はんには桂の樹イが生えとるんやそうですわ」

「桂って、あの桂かい」

「へえ。あの桂や。月桂樹やね。こら相当にでかい樹イらしいですわ。五百丈からあるそうでっせ」

五百丈の樹木など想像も出来ない。

「でも」

五百丈の兎よりは在りそうな話でつしやると林蔵は言う。

それは慥かにそうだろう。樹木は禽獣と違つて枯れぬ限りは何処までも巨きく育つものである。神域にある御神木は巨きい。深山幽谷にはもつと巨大な樹もあるだろう。

「その樹の桂子が何処ぞに降つたゆう話まであるゆうことですわ。真実かどうかは知りまへんけどな。で、まあこれの手入れをしてるのが、桂男や」

「桂——男かいね」

「元は唐土の何とかゆう男で、仙術の修行した者やそうですわ。まあ、唐土やと、何でつしやろか、この仙術ゆうのは、御法度やそうですな」

「御法度って、禁じられとるゆうことか」

「へえ。勝手に学んだり修めたりしたらあかんものらしいですわ」

「せやかて仙人みたいなのは居るやろ。衆の仙人かて仙術使いやろし。ま、そんな阿呆らしもんがあるかないかは別にして、唐天竺なんぞは仙術の本場なんぞと違うか」

「そやね、まあ其奴はモグリやつたん違いますか。兎に角、その男は罰せられて、月に飛ばされよって、桂の樹イ伐らされてるんやそうですわ」

そら奇つ態な話やでと言つて、剛右衛門は毛氈を敷いた縁台に腰を下ろした。

「けつたいゆうより、難儀やなあ。五百丈の樹やろ。植木屋何百人呼んで来たかて終わらへんがな」

「まあ、そこは仙術使いやさかいね。巧いことしよるんやと思えますけどね。この桂男が、こ——さつきの旦那はんみたいだね、月をば凝乎と見ておると、見られてのに気づくんでつしやろか。此方向いて、招く謂いますねん」

「招く——か」

「へえ。手招きする。あの隈が、おいでおいでする」

するかい、と言つた。

いや待て。

さつき——。

蠢いて見えた。ああいうことか。

「招かれると——」

どうなるのやろ、と問うた。

「死ぬんだす」

「死ぬ。それで持ってかれる言うたんか。いやはやそら物騒や。物騒やけど——お月はん見て死んだなんて話は、とんと聞かんで」

「直ぐに死ぬのと違いますわ」

「どう死ぬる」

「月ゆうのは、言うてしまえばあ、つち側でつせ。此岸しがんに対しての彼岸やね。お陽ひいさんと違ちごうて、月の光は生き物ものに有あり難がたいものと違ちがいますやろ。月は生きてはおりまへんで。黄泉よみの国くにみたいなものですわ。そつから招かれる訳わけやから、こら——命いのちが縮ちぢむゆうことですわ」

「命いのちが」

多分たぶん、と林蔵は言う。

「寿命じゆんを吸すい取とられますのんや。残り十年が八年、五年が二年と、目減めげりしてくんやろうと思おもいますせ。ま、桂男けいなんの話わたりは、こらハナシですわ。何かの喩たとえかお子こに向けた創つくり話わたりか、そんなもんなんですつやろが、この、寿命じゆんが縮ちぢむゆうのはホンマですわ」

「月つきイ見ておると寿命じゆんが縮ちぢむゆうんか」

「そやなかつたら、こんな愚おろにもつかんハナシわざわざ創つくったりしまへんで。理屈りくつは解わかりまへんが、古来いにしよより月の満みち欠かけが世よの中なかのあれこれと通とおじておるのは慥たかですつやろ。月つきを讀よむんは日ひイ讀よむより大事だいじですつせ。何か靈たま力りきがあるんやろ思おもいますわ。生なま気き吸すい取とられるゆうんですかいな。そやからね、ええでつか旦那だんなはん、月つきイ見てええのんは、十五夜じふご——お月見つきみの時ときだけですつせ」

「月見つきみはええのんか」

重陽ちゆうようの節句せきぐん時はええんですわ、と林蔵は答こたえる。

「せやからわざわざお月見つきみイ謂いうのと違ちがいますか。こら、団子だんごこさえて芒すすきイ飾かって、改かまつて觀みる訳わけですわ」

「なる程なるほどなあ」

旦那だんなはんの寿命じゆんが縮ちぢんでもうたら私わたしが困こまりますのんやと、林蔵は眉まゆを顰ひそめて言う。

「困こまるか」

「困こまりますやろが」

「まあ困こまるかもしらんが——お前まへさんやつたら何なにとでもなるやろ。まだ若いし、何なにより商才しょうさいがあるわ。それにお前まへはんの本業ほんごうは帳屋ちやうややないか。今はこらして商売あきな指南しんぽんみたいなこととして貰もらうけども、あんたそれで喰くうとる訳わけやないのやろし。縦よこんば儂あまとこが転くるけたかて、そう損こはなない筈はずやで——」

何を言うてますのん——と言いって林蔵は哀あはれしそうな顔かほをした。

「私はね、旦那はんのお人柄に惚れて、こうしてお手伝いさして貰えますのやで」

「人柄て何や」

「杵乃字屋剛右衛門は名前の通り剛の者や。傑物でっせ」

持ち上げるやないかと言うと、真実でんがなと林蔵は答えた。

「私が力及ばず乍らお付き合ひさして貰てるのは、旦那はんを見込んだからや。損得勘定やないです。銭目当てやったら、取り入って婿にでも入りますわ」

「尤もや。けどな林さん、儂はな、まあ自慢やないけど裸一貫から苦勞して身代拵えて——あなたの言う通り昇り詰めた男やで」

「承知してますわ。旦那はんを太閤はんに模える者も居りますで」

「いや——せやから昇り詰めてしもたんや。きつと、今が一番ええ時や。これ以上良くはならんで。昇り詰めたら落ちるだけやろ」

「何を弱気なこと言うてますの。旦那はん、杵乃字屋はこれからですよ。この商いは」

まだまだ大きゅうなりませと林蔵は言った。

「ま、お前さんの才覚は承知しとる。そのお前さんが言うんやったらそうなんやろ。せやけどな、儂はもうそろそろ隠居したい思うとるのや。ま、やることはやつたし、何の不足もないわ。儂は倅せや。もう思い残すことはない。後は余生を面白可笑しゅう暮らすだけやで」

林蔵は——苦笑した。

「また欲のないことを」

「欲なんぞないて。今更何を欲しがれ言いますのや。銭もたんとある、屋敷かてほれ、分不相応に立派や。蔵かて六つもある。家族も縁者も達者やし、幸い誰に憎まれとる訳でもない。商売かて繁盛しとる。自分の身体かてまだ丈夫や。倅せや」

「しあわせ——でんなあ。あやかりたい程や」

「せやろ。儂はな林さん、満ち足りとおるんや」

「満ち足りてますか」

間違ひなく満ち足りている。

「儂はここいらで見切るのが一番ええと、そう思うとります。人も商売も引き際が大事なんやと、そう教えてくれたのは林さん、あんたやで。月は満ちれば欠けるが道理。ならば欠ける前に引いたらと、こう思とる訳ですわ。満ちた処で上がりしたら、ちゅうこつちゃ」

もう気苦勞はしとないわと剛右衛門は言った。

「何もかも後に譲って残る余生を気楽に暮らす、それが儂の倅せの仕上げやで」

「お店はどうしますのん」

「そら案ずるまでもない。ほれ、いつぞやお前はんも言うつつたやろ。うちの大番頭は使える男やと」

「へえ。旦那はんは奉公人に恵まれてます。ホンマにそう思いますわ。大番頭はんは元より下は丁稚小僧に至るまで、みな真面目やし、誰もが旦那はんを慕うております。こんなお店は他に知りまへんで」

そう、それは真実ほんじつにそうなのだ。

自分は限りなく恵まれていて。剛右衛門は心底そう思っている。

「誰を跡目あとめに迎えようと、店の方は心配ない。今かて半ば奉公人に任せてるようなものや。みなきちんと働いてくれとるわ」

儂はもう、ただ見ておるだけでええのやわ——と剛右衛門が言うと、だからこそ——と、林蔵は継いだ。

「長生きして貰わなあかんのです。このお店は、旦那はんを要かなめに保もつてるんでつせ。ええでつか、隠居すんのと西向くんでは大違いや。今旦那はんにもしものがあつたなら、どないします。お店はバラバラや。奉公人から取引先から、みな路頭に迷つてまいますがな。私わたくしかて困る。お嬢はんかて——」

「ああ」

お峰。

娘の顔が浮かんだ。

「お峰はんかて泣きますわ。嫁入姿見やはるまで、いや、お孫はん抱かはるまでは達者で居て貰わな——」

そう、そのことだ。

林蔵をわざわざこの向月台まで喚よび出したのは、並んで月見がしたかったからでも、こんな与太話をしたかったからでもないのだ。

「ま、儂のことはええわ。それよりもどうやつたんや林さん。その——例の尾張おわりの城島屋きじまやさんの方は」

娘の縁談である。

城島屋は尾張でも指折りの回船問屋だそうだ。

その次男坊が剛右衛門の一人娘であるお峰を見初めたのである。

何処で見初めたのかどんな想いを抱いたのか剛右衛門は知らない。勿論その次男坊がどのような者であるのかも知らない。ただ、不実な男ではないようで、斯斯然然かくかくしかしかに御座候ごうと、剛右衛門宛むかひてに文を送つて来たのであつた。

本人に会つてみるまで判らぬことはいふものの、悪い話ではない。

文面から邪な意図は汲み取れなかつた。眇すかめで読んでも深読みしても、実直な人柄が滲むような文言が連ねられているだけである。書いた者は善人なのだろう。それ以前に、先方は大店である。本当ならば、これは紛まがう方なき良縁だ。

但し。

剛右衛門の子はお峰一人である。城島屋にお峰を嫁がせる訳には行かぬのだ。婿を取り杵乃字屋の身代を継がせなくてはならぬ。それよりも先ず——手塩てもとにかけた娘を手許てもとから離すのは嫌だつた。

尾張はそれ程遠くはない。

遠くはないが、剛右衛門にしてみれば遠方である。

縁を纏める気になるならば、養子に来て貰うよりない。

とはいえ、先方の事情も詳らかに判らない。

本人がどれ程真剣だろうと、親の想いお店の事情はまた別である。惣領でないとはいふもの

の、それ程の身代であるのなら、簡単に倅を養子に出すとも思えない。

良い話ではあるのだが悶着を起こすのは嫌だった。

そこで――。

尾張に用があるという林蔵に、様子見 旁 使いを頼んだのであった。

恐縮してましたで、と林蔵は言った。

「息子が阿呆なことしましたゆうて丁寧に頭下げられましたん。大事なお嬢さん文ひとつでくれなんて、こら非礼にも程があるて、ご主人大汗かいてましたわ」

「親御さんはご存じなかったのやろか」

そやないんですわ、と林蔵は続ける。

「知っておったようですわ。けど――怒つとる思とったようすわ」

「怒つとるて、儂がか」

「へえ。どないして詫びよか、礼尽くそかて思索してたらしいですわ。私かて、大坂から捻じ込みに来た思われたんでっせ」

わてそないに文句言いに見えまっか、と言つて林蔵は笑つた。

「捻じ込みて――こういう場合、普通は怒るもんなんやろか」

「怒つてもええかもしれまへんな」

そんなものだろうか。

「旦那はんはお倅せやから怒らんのやろね」

金持ち 喧嘩せず 謂いますやると林蔵は軽口を叩く。

「せやけど彼方さんは平身低頭、必死ですわ。それもその筈、城島屋の大旦那、倅の想いを遂げさせてやりたいと、こう思とる訳ですわ」

「すると何や」

親もその気ということか。

「その気ゆうより大乗り気ですわ。まあ、親でっから子オは可愛い。その次男坊ゆうのも真面目な男らしいんですわ。で――それ以前に杵乃字屋はんと親戚になるゆうことは、先方にとつても御の字なんですわ。こら商売的には大当たりですわ」

そう――なのか。

「大当たりか」

林蔵が言うのなら間違いないのだろう。いや、これが色色な意味で良縁だということは、素人にでも判るだろう。

「先方は近いうち、出来るだけ早うに旦那はんに直接お目通りしてお願いをば致したいと、そう仰せんなつたりましたけど――な」

「けど、何や」

林蔵は何処か含みのある間を持たせて黙った。

「反対——なんか」

林蔵は横を向く。

反対はしまへんと言う。

「そろ何とも含みのある言いようやな」

何ぞ裏があるンかいと問うと、裏なんかあらしまへんと林蔵は言った。

「商売指南役としては、賛成するよりありまへんわ。この話イ流すんは阿呆ですやろ。せやけどね」

こらお身内のことですよ——林蔵はそう言った。

「身内のことでどういう意味や」

「そうやないですか。こら元より商売の話やないんでっせ。縁組みの話ですよ。婿を取るんは杵乃字屋やのうて、お峰はんやないでつか。この話はお嬢はんの、お峰はんの縁談なんです。旦那はん。私はね、銭勘定の話やたらなんぼでも相談に乗りませ。指南料頂戴してまっからな。儲かる損する、稼ぐ遣う、そうゆう話には口出しますわい。でも口出してええんはそれだけや。仲人口なら渡世違ひ、お身内のお話やたら余計に筋違ひや。こら、私なんぞが立ち入れん話ですよん」

「そ——やな。そやけど林さん、こらただの知り合いとして尋くのやが、どうなんや、その」「いや、旦那はん、そら私には」

判りまへんわと林蔵は言った。

「えろうあつさり言うな」

へえ、と林蔵は答えた。

「先ず大事なんはお峰はんの気持ちでっしやる。それからお店の方方の気持ちイゆうのもありますわ。幾ら儲かるからて、そこ酌まいで話進められんのと違いますか」

生意気語ってしもうた、と林蔵は畏まった。

「ま、私の方は旦那はん次第や。旦那はんの指図があれば」

いつでも仲ア継がさして貰います——。

「よう、お考えになつて——」

そう言つて、

林蔵は深深と頭を下げた。

三

剛右衛門は考えている。
勿論、縁談を進めるべきか否か、という問題に就いてである。
迷うまでもないことなのだ。

何を迷うのか。何故決められぬのか。

今までこんなことはなかった。剛右衛門は即断即決を身上として来た男なのである。

部屋を見渡す。

辺も広い。青青とした畳。藷草の香り。

欄間は群雲に三日月の透かし彫り。

襖、絵は松に鶴。

重心を傾ける。

肘の下には脇、息がある。臀の下には上等な誂えの座布団がある。唐草の細工彫りの銀煙管を衝える。

申し分ない。

いや——有り難いことである。二十五年前、喰うや喰わずで大坂に流れ着いた時、こんな身分になれるとは思ってもいなかった。だから剛右衛門はこの、今の状況に感謝している。

雨露を凌げて——。

三度の飯が喰えればそれで充分だと思っていた。

だから剛右衛門は——満ち足りている。

——その所為やるか。

剛右衛門はそんな風に思った。

満ち足りているから欲が出ない。欲がなければ商売は出来まい。もうこれでいいと思ってしまえば終いである。上を見ずに梯子を上る者はいない。領土を広げたいと思わぬならば、武將も戦をせぬだろう。

——儲かりたいと思わぬから。

儲け話に気が動かぬか。

焼きが回ったということだ。

矢張り隠居するが得策かもしれぬと、剛右衛門は思う。大番頭の儀助なら、こんなことで迷うようなぬるい商いはするまい。

——いや待て。

城島屋の次男を婿に取るとなれば——身代はその者に譲ることになるのだ。
なる程、剛右衛門はその辺りのことを失念していたようである。

一服つけようと煙草盆に手を伸ばした時、明かり障子の向こうから旦那様——と呼ぶ声が聞こえた。

儀助の声である。

入り、と言うとすると障子が開き、正座した儀助が辞儀をしていた。

丁度良いわ、相談があったんやと剛右衛門は言った。

「相談——でっか」

「ああ、まあ入り。お前の方こそ神妙やないかい。話があるんやったら先にし」

「へえ」

儀助は畏まったまますると部屋に入つて来た。普段とは様子が違う。何や何かあったんかいと問う。

「旦那さん。申し上げ難いことオ申し上げて宜しゅうございますやるか」

「申し上げ難いて、箴言垂れるゆうことか」

「そないな大層なものと違います。その、少しばかり心細りなつたものでっから、差し出がましいことと思つたんでっけども——旦那さんのお気持ちイお聞きしておきたいと、こう思いまして」

林蔵はんのことですわ、と儀助は言った。

「林さんがどないした」

「へえ。旦那さん、林蔵はんを——」

信用されてまんな、と儀助は小声で尋いた。

「そら信用しとるわ。お前かてそうやる。それとも何か儀助、あの林さんに怪しとこあるゆうのんか」

儀助は下を向いた。

「何や何や。ええか、あの男のお蔭で、うちとこがどれだけ良うなつたか、そら誰よりもお前が判つておることやる」

良うして貰てます、と儀助は答えた。

「手前も旦那さんの許で十年、一端の商人気取つてましたけど、何のまだまだでした。林蔵はんには教えられることは多い。目から鱗が取れる謂いますけど、まさにそれですわ——」
そうだろう。

林蔵に指南役を頼んだその経緯は忘れた。

どうしても思い出せない。いつの間にか親しくなつていて、気づいたら彼此相談し始めており、済し崩しに教えを乞うようになつていたという感じである。

とはいえ、別にその時分商売が巧く運んでいなかった訳ではない。杵乃字屋はずっと繁盛していたし、運気は隆盛で、左前になるような気配があつた訳でもない。

でも、どういふ具合だろう。

これでいいのだろうかと、剛右衛門はふと思つてしまったのだった。
林蔵の指摘は常に的確だった。

帳簿を微に入り細を穿つて執拗に改め、用途額面を洗い出す。幾度も幾度も勘定し直し、実際の銭の出入りを念入りに確認する。そうすることで使途不明な金子をなくす。儉約出来るところは徹底して削る。そうしたことを、上から下まで徹底する。

それだけで——売り上げの額面は変わらないのに——実入りが二割から増した。

剛右衛門は、長年入りを増やすことばかりに腐心していたから、出を削るといふ発想は新鮮だった。

「何や、お前——真逆、帳場の仕切りに文句つけられたん根に持って、臍を曲げてンのと違うやろな」

滅相もありまへん、と儀助は即座に答えた。

「林蔵はんに見て貰うまではこれでええ思てました。せやけど、とんでもない勘違いでおました。杜撰やった。そら、身に染みました」

「杜撰てことないわ。儂かてあれでええ思てたわ。お前が決めたことやない、お前は儂が決めた通りに為てたんやから、気に病むことはないやろ」

「へえ」

「況て逆恨みなど」

「そら違います。そないな心得違いはしてまへん。素ウで感謝しとります」

儀助は畳に手を突いた。

「手前だけやない。奉公人一同感謝してますよつて」

それはそうだろう。

林蔵はそうして捻出した余剰の儲けを、奉公人に還元するように言ったのだ。放っておいたら消えてた銭や——。

最初からなかったもんと思えば損した気にはなりまへんやると、林蔵は剛右衛門に言った。

どういふつもりなのか判らなかつたが、剛右衛門は林蔵の言う通り、奉公人一同に余剰金を分配した。

これが——効いた。

士気が上がった。

そして。

「せやつたら何か。こないだ奉公人に仰、山暇ア出したんが気に入らんのか。そういえばあの時、お前、随分反対しよつたしな。蒸し返すか——」

林蔵は、分配した余剰金の遣い道に目配りをせよと剛右衛門に助言した。

大半の者は手当てを貰つて遣る気を出し、いつそう仕事に精進するようになった。

しかし——注意して見るなら、慥かに不屈き者も交じっているように思えて来た。

剛右衛門は、抛ん所ない事情があるような者を除き、すぐに金を遣い果たしてしまつた者どもの動向に注意するよう儀助に伝えた。博奕に注ぎ込む。女に入れ揚げる。要するに貰つた金を泡銭と考えている者、ということである。

案の定——。

そうした連中は、働き振りが宜しくない。素行も悪い。三月ばかり様子を見て、働きの悪い者には注意を促した。

それでも素行が改まらない者は解雇せよと林蔵は言った。

剛右衛門はその助言を呑み、都合二十六人に暇を出した。

あれも今は正しかった思うてますと、儀助は言った。

「あの時は要らん情け心出して余計な口利いてしもたんですけど——でも連中が首切られたんは——あれ、仕方ありまへん。自業自得や。ま、中には長く勤めた者も居りましたよって、穩便に済ませられるもんやったらそうした方がええかと思ただけで、正直、あの連中が更生するとは思えまへんでした」

「せやけど、お前は辞めさせずに済まされへんか言うておったやないか。頭数が減れば仕事も滞ると言うておったで」

「あないに首イ切つてしもたら下の者が怖がる思たんですわ。でも逆やった。残った者は怖がるどころかほつとした。結果、風通しが良うなった思います。繰り上がりで昇格した者も居りますし、持ち場も変わり、適材を適所に置くことも出来ましたよって、働き易うなったことは間違いない。頭数は減りましたけども、その分手取りも多なつたし、奉公人一同、よりいっそう奮起しておりますよって、手エが足りんという声もなく」

「そらそやろ」

無駄を省いただけだ。

「膿イ出しただけや。放つておいたら膿んだとつから腐るんや。せやから文句を言われる筋合いはないで」

儀助はもう一度畳に手を突き、頭を下げた。

「文句など——ごさいません」

「せやつたら何やちゆうねん。あれ以降、林さんの持つて来る商談はどれもこれも大当たりやないか。大繁盛の福の神やろ。怪しいとこなんぞ何も無いわい。何が不服や。あの男に払うてるのは月月僅かな顔面やど。お前の給金よりずっと安いわ」

承知しております、と儀助は頭を下げたまま言った。

剛右衛門は多少うんざりし始めている。

「そらな、あの男かて商売人や。仲ア取り持った先方からもなんぼか貰とるかもしれんわ。せやけども、そらあの男の才覚やろ。うちとこが損する話やない。付き合うて得はあれども損はない。何処を疑えちゆうねん」

「へい」

「へエやないわ。それとも何か儀助。儂があんたの林蔵ばかり重用して——お前を蔑ろにしとおると、そう思とるんやないやろな。そら、大けな考え違いやど」

男の恪気は洒落本の種にもならんでと剛右衛門は刺刺しく言った。

「どうなんや。そなんか」

「違います。そやないんです」

「なら何ね。ぐずぐず言うてないで、ちゃきちやき喋しゃべったつたらええやる。そないに儂の機嫌損ねるような話なんかい」

林蔵はんは頭のええ人ですわ、と儀助は言った。

「商才もある。手前は教わることばかりや。旦那さんの仰せの通り、お店たなにとつたら福の神かもしれまへん。ただ」

「ただ何や」

「あの人は旦那さんのことを」

どないに思っってはるんやろ——と儀助は独白するように言った。

「どうって」

人柄に惚れた——と言っていたか。

真偽の程は兎も角、いづれ自分でひけらかす話ではない。剛右衛門は黙した。

理屈やのうて気持ちの問題なんですわと儀助は続けた。

「手前ども奉公人一同は、旦那さんを心より敬うやましますし、また頼りにも思うとります。こちら真実や。でも」

「林さんが儂まうこと嫌きらうてる——とでも言うか」

「そ、そうは思いまへん。思いまへんが、そこはそれ、奉公人と林蔵はんは違いまつせ。手前どもにとつて、旦那さんは主あなですわ。なくてはならぬ、掛け替えのないお人です。旦那さんは謂いわば杵きね乃字屋ゆう扇の要かや。でも」

林蔵もそんなことを言っていた。

「でも林蔵はんにとつては違いますやる。あの人にとつて、旦那さんは大勢居おほいはるお客の一人ですわ」

「そら——仕方ないわ」

——なる程。

何もかも林蔵の言う通りだ——と、剛右衛門は思った。

儀助のこの苦言は、全て剛右衛門への忠誠心、尊敬の念から出ているものなのだろう。高だか一介の帳屋風情が、己の大事な主と対等に口を利く状況は我慢ならぬ——ということか。

「まあ、お前がそうやって儂まうこと立てて、心配してくれる気持ちは嬉しいわ」

剛右衛門がそう言うと、儀助は眉間まゆげに皺しわを寄せ、何とも奇妙な顔になった。

「せやけどな儀助、それも心得違いゆうものやで。儂まうかて、今でこそこうして主人面まうしておるけど、元は流れ者や。別に偉いことなんかあらへんがな。お前等まへらと一緒にやで。林さんかて同じやろ」

そうやないんです、と儀助は言う。

「いや、旦那さんのお言葉は一言一句正しい思います。何もかも仰せの通りですわ。ただ、手前はその」

旦那さんが利用されてるような気がしてならんです、と儀助は結んだ。
「利用で、林さんにか」

「へえ。あの人は切れ者だす。彼此と良くしてもくれてますわ。でも、手前ども奉公人と違くて、あの人は旦那さんに義理イ立てる謂われもないやないですか。何とゆうてもあれ程の策士でっさかい、その」

「儂イ騙してどないするゆうのや」

「騙すゆうのと違うんですわ。何とゆうたらええのんか、その——」

「大概にせえ儀助。あのな、林さんは昨夜、お前のことを大層褒めてはったで。あんなええ奉公人は居らんゆうてな。いや、儂もそう思うとるんやで。有り難いこつちやと答えたわ。それがどうや。オノレの方はオノレ褒めたった林さんを悪党呼ばわりしとる訳やど」

「へえ」

儀助は額の汗を拭く。

それから顔を上げ、城島屋の件——どないお考えですと、ぼそぼそと言った。

「それや」

剛右衛門はそのことを考えていたのだ。

「儂の相談ごとゆうのはそれなんや。儀助よ、お前どう思う。儂はな——」

迷っているとは言えぬ。

「お前を信用しとるさかい、こないして尋くのやで」

「反対——ですわ」

「反対なんか」

即答である。剛右衛門は少し意外に思った。

「何でや。商売大きゆうする好機やないか。その理由を聞かせ」

「そら商売は大きゆうなるかもしれまへん。せやけど旦那さん、城島屋はんの息子さんを婿に取るんでっせ。こら、お店乗っ取られることになるのと違いますか」

「乗っ取りやて」

「林蔵さんは何も言わはりませんでしたか」

「何をや」

「噂だす。尾張の城島屋は——あの手この手で競争相手の店エ乗っ取ったり、時に潰して商売広げて来た悪辣な店やゆう」

「そんな話は聞かんわ」

林蔵は何も言っていないかった。

あの林蔵に限って、そんな大事なことを聞き逃す訳がない。ならば——それは何かの間違いか、意図的に流された中傷だろう。

「悪質な嘘や。真実なら林蔵さんが知らん訳ないわ」

そうなんですわと儀助は言った。

「そうて、何や」

「林蔵さんが知らん訳はないんです。そんな大事な話、あれだけ耳聡いお人の耳に入らん訳がない。違いまっか」

「真実やつたらな。せやから嘘や言うてるのや」

「嘘と言ひ切れますやろか」

「噂やろ。あんな、儀助。うちかて悪い噂はあるで。この杵乃字屋はな、別にあくどいことは何も為ておらんがな。でも商売が巧く運ば悪口は出る。真つ当に商いしとつても、蹴落とされる者は出るわい。競争やからな。競争に妬み嫉みは付きもんや。商人は悪口が出てなんぼやないかい。気にしてられるか」

「待つてください旦那さん。そら嘘かもしれんし、火のないとこに立つた煙かもしれん。でも噂があることは事実でつせ。そんなら林蔵さんの耳に入らぬ訳がない。自分の耳に入つておつて、旦那さんのお耳には入れんゆうのは納得行きませんわ。悪い噂があつて、それがただの噂やつたら、余計に説明しとかなあきまへんやろ。他の筋から旦那さんの耳に届かんとも限りまへんのやで」

「そうか。いや。」

「余計な心配懸けさせどうなかつたのかもしれないやろ」

「敢えて黙つていたのかもしれない。」

「根も葉もない噂やつたら、届いた時に違うと言へば済むことや。そんな」

「いや。」

林蔵は昨夜、城島屋との縁談にはあまり乗り気ではないという様子を見せたのだ。

あれは。

「お前、その噂、誰から聞いた」

「最初は献残屋の柳次ですわ」

「献残屋で」

献残屋とは、大名家から払い下げて貰つた献上品を売り捌く渡世のことである。

柳次というのは、慥か六道屋とかいう屋号の献残屋で、暫く前に鉢やら皿やらを売り込みに来たのだ。品が良かったため買い取り、以降も出入りしているようである。

「あれは江戸者と違うんか。古道具屋風情が何でそないなこと知つてるんや」

「あの柳次は普通の献残屋と違います。諸国を渡つてますのんや。大坂の前は尾張に居つたんですわ」

「そんな。」

「そんな者の戯言真に受けとんのかお前」

「た、ただ真に受けたのと違います。手前も調べたんですわ。そら林蔵さんには及びまへんけども、大事な時程慎重になれゆうんは林蔵さんに教わつたことで」

噂は慥かにありましたで——と言つて、儀助は顔を向ける。

「三軒盗つて三軒潰したゆう噂でしたわ。勿論、尾張まで出向いて確かめる訳には行きまへんよつて、あくまで聞いた話、噂だす。手前も丸呑みで信用はしておりまへん。せやけど、大坂に居て聞こえる話でつせ。尾張まで行かれてあの林蔵さんが聞き逃す筈はない。なら旦那さんもご存じで、その上でご考慮されてるんかと」

「知つとつても知らないでも同じこつちや」
「でも旦那さん、知つて黙つたままゆうのは、何か魂胆があるとしたか——手前には思えんです。城島屋が林蔵さんに、うちとこより多くの銭イ出しとつたらどないなります。林蔵さんは商売でやつとるんでつせ。悪人でなくとも商売人や。あの林蔵さんが先方の凶面に乗つかつたなら、こつちは勝ち目がおまへん」

盗られまつせ、と儀助は言った。

店エ盗るか——。

「上等やないか」

それが真実であつたとして。

「盗る気イなら、逆に盗つたら、そうは思わんか」

「思いまへん」

儀助は再び即答した。

「手前は——そういう商いは出来まへん。旦那さんかてそうでつしやる。この杵乃字屋は」

眠たいこと言うてるんやないで、と剛右衛門はきつい口調で言った。

「林さんが言わなんだなら言わなんだだけの理由があるのやる。巷の噂ア小耳に挟んだくらいでそないに弱気ンなつてどないするんや。腰が引けるやないか。儂はな、汚い商売せえとはゆうてないわ。強気にならんと負ける、ゆうてるのんじや。儀助、見損のうたで」

へえと言つて儀助は平身低頭した。

「儂はな、お前にこの店譲つたろと思つたんや。お前は真面目やし、目筋もええわい。跡目には申し分ないと思つた。林さんかて太鼓判押ししてくれたわ。それがどうや。他所から婿取るいう話になつた途端にその為体やないかい。揚げ句に林さんまで疑いおつて。他人に盗られとないんやつたら、それなりにせえ」

「つまり、この話進めるおつもりなんですか」

——いや。

迷つていたのだ。

林蔵も強く勧めた訳ではない。

でも。

「も」

勿論や、と答えた。

「またどない美味しい話や。その益体もない噂が、ただの噂やつたら——こら千載一遇の好機やる。真実やつても、負けなええこつちやないか。勝てばええのや勝てば」

「旦那さん——」

そないな旦那さんの顔初めて見ましたわと儀助は言った。

「顔がどないした」

いいえ、と言つて儀助は唇を噛んだ。

「不服かい」

「へえ。いや、しかし旦那さん」

「何やいな。まだ言いたいことがあるか」

「お嬢様の」

お峰様のお気持ちはお確かめになりましたかと儀助は問うた。

「お峰の気持ちやと」

「お峰様は何と」

「まだ」

何も言っていない。

決めたのは今である。

「まだこの話をしてないわと答えた。

「商いにならん話やったら、お峰がどう思おうと端はなからナシや。そこ見定めてからでないと話
すだけ無駄やないか。こないな話、あらへんがな。気持ちゆうたかて、お峰にしてもそないな
顔も知らん男、好きも嫌いもないやろしな」

「旦那さん、旦那さんの仰せんなることはご尤もや、思います。商売は——戦いくさみたいなものな
んでつしやる。相手が呑みにかかつて来たら、呑み返す。そのくらいの気持ちは手前にもあり
ますわ。でも——」

先まず呑まれんのはお峰様やと儀助は言った。

「何やて」

「先方がゆうてるのは商売の話やない。先方はお峰様との縁談を持ち掛けて来とるんだす。商
売の話はその後のこと——やないんですか。先まずお峰様のお気持ちを」

生意気な口を利く。
しかし。

林蔵も同じようなことを言っていた。

「後も先もあるかい。こら——一緒の話や」

「でも旦那さん」

「煩うるさいわ。お峰は儂の娘や。商売の話やないのやったら、番頭につべこべ言われる覚えはな
いわ」

去ね、と剛右衛門は怒鳴った。

だだっ広い座敷は閑寂となった。

参

縁に出て天を見上げると、月が出ていた。
満月まではまだ四五日かかるだろう。

兎だか、蛙だか。

——男か。

「男には見えんわ」

剛右衛門は独り言ちた。

見ては——いけないのだったか。

眼を逸らすのと同時に、薄暗くなつた廊下の奥に人影が現れた。

「旦那さん」

「儀助か。何の用や。もう店閉めたんか。こないだみたいな話やつたら御免やで——」

三日。剛右衛門はずつと考えている。先夜の儀助との問答で一度は話を進める気にもなつたものの、頭を冷やしてみれば所詮売り言葉に買い言葉。根元の処では何も解決していない。また蒸し返されても整理がつかぬ。

お峰とは顔も合わせていない。

「へい実は旦那さん、旦那さんに会うて戴きたいゆう人がみえてまして」

「儂に会いたいと」

これは剛右衛門様——とさらに奥から声がした。

「お前は——柳次はんか」

「六道屋でございやす。ご鬚戴いておりやす」

「おい儀助、お前」

オットそうじゃあねえんですよ剛右衛門様と言つて柳次は儀助を追い越し、すたすたと廊下を進んで、懇懃無礼に会釈をした。

「城島屋の件は大番頭さんから聞いてやすぜ。何てえんですか、この、こつちじゃ——いて、こましたろ、てえんですかい。いや上方の言葉は難しくつていけねえね。あたしは元は紀州の生まれで、江戸で育つて都に落ちた。落ちて以降は東へ西へ、流れ流れて暮らしててエろくでなしなもんで、言葉ア一向に定まらねえが、上方言葉だけは身に染みねえんです」

儂も紀州の出やと剛右衛門は言つた。

「そんなことより、何の用や。城島屋の噂話やつたら儀助から聞いた。そのことやつたらもうええわ」

「そのこと——なんでやすけどね、もうええつてエ話じゃねえんですよ剛右衛門様。イヤ大番頭さんの様子だと、旦那アこの縁談進めるお腹積もりのようで」

「儀助。お前、外の者に何をべらべらと」
 まあお静まりになってと柳次は若氣で言った。
 「剛右衛門様ア、城島屋とやり合、おつもりなんでやしよ。そうなら聞かない手はねエと思ひ
 やすがね」

「やり合うて何やねん。こら——縁談やで」
 またまた、と柳次はいつそう若氣た。

「あたしの話イお聞きになったといまさつき仰ったじゃねエですか」

「だからもうええと言つとるんや」

「良かアねエや。城島屋ア悪ですぜ。あそこの次男坊——藤右衛門でんですがね、ありや同じ
 手口で、三島のお店ひとつ潰してゐるんだ」

「どんな手口だ」

柳次は思わせ振りに笑つた。

「なる程な。だがな柳次はん。お前はんみたいな何処の馬の骨か判らんような男の話イ丸つと
 信用する程、儂は甘くないで」

「高が古道具屋——とお言いなさるかい。高が帳屋は信用しても献残屋は信用出来ねエてえこ
 とですか」

儀助を焚き付けていたのは此奴か——。

「あんた、密屋の林蔵に——何ぞ遺恨でもあるんか」

「遺恨はねエが——まあ、その昔、痛工目に遭わされたこたアありやすぜ。だけど怨んじやい
 ねエ。お互様でやすからね。あたしも彼奴も同じ穴のお狸様よ。化かし化かされる仲——つ
 て奴でしてね」

蛇の道はへびですぜ旦那、と柳次は言つた。

「あたしア林の字と違つて、此方さんからお銭をふんだくろうたア思つてやせんからね。鏝一
 文、くれたあ申しやせん」

「そりや殊勝なこつちやな。せやけど、それやつたら余計に信用出来んで」

無料程高価いものはない。

「ご心配なく。金蔓ア別にありやす」

柳次は横目で背後を示した。

畏まつた儀助の横に、どうやらもうひとつ人影があるようだった。

「——誰や」

「へえ。生き証人でさ。城島屋に潰された松野屋のお嬢さん——要するに藤右衛門に引つ掛け
 られた娘さんですよ」

「何やて」

「あたしやね、彼方様から城島屋への意趣返しとの相談を受けてますんで」

俯いた黒い影は、俯いたまま覇氣のない動きで儀助に一步だけ近付いた。箱行燈の心許ない
 光に当たる。靄靄として、まるで、月の隈のようだった。

「林蔵がどう言ってるかは知りやせんが、あたしの方にはこれこの通り、証人が居るんで」
「オノレが言うところだけやる。偽者かもしれん」

月の隈ならただの模様だ。
「お疑えなら明るい所で篤とご検分ください。どうです旦那、座敷イ上げちゃあ戴けやせんかね。ま、あたしを信じるも林蔵を信じるも旦那次第だ。どっちを取るも自由ですがね——話イ聞いてから決めたって遅かアねエと思いやすがねエ」

剛右衛門は夜天を見上げた。
命を吸い取る円い明かりが、耿耿と照っていた。
広過ぎる座敷。

剛右衛門は上等の座布団に腰を下ろし、脇息に肘をかけた。行燈に火を入れた後、左後方の隅に儀助が畏まった。

——お前は。

彼方側に座るべきではないかと剛右衛門は思う。

剛右衛門の真正面に女が座った。御高祖頭巾を被っている。女の後ろには柳次が控えた。
室内の光量が安定した頃、女は頭巾を取った。

二十五六か。

頸の辺りはもつと若い。

すつと面を上げる。

剛右衛門は息を呑んだ。

——この顔は。

いや。見たことがある筈がない。見たことがあるような気がしただけだ。人の顔など誰もそう大きく違っているものではない。面差しが似ていて背恰好が同じぐらいで、服装や髪の違いが近ければ、誰でも同じように見えるものだろう。

さへと申します、と女は言った。

「さ——とえ」

——それは。

誰だっただろう。

いや、考えるだけ無駄だ。

この娘とは初対面だ。

松野屋の一人娘の里江様ですと柳次は言った。

「松野——屋なあ」

ご存じですかいと柳次が問う。

似たような名前のお店は山程あるだろう。

知らぬ、と答えた。

「此方と同じ船問屋で——いや、今はもうねエ。城島屋になっちゃいましたかね。主立った古株の奉公人は放逐され、元の主は首吊つて死んで、一家は離散——」

おつと済まねえと柳次は言葉を止めた。

「お母はんは——」

里江が継いだ。

「心労が祟つて床に伏し、お父つつあんより先に亡くなりました。お父つつあんはその後を追ったんです」

「そら——」

難儀やつたなど言つた。里江は頭を垂れた。

「その後暫くは、大番頭だった者が私ども親子の面倒を見てくれていたのですが」

「待ちなはれ。あんた、一人娘なんやろ。ご両親が亡うなつてしもたら、独りやないんか。私ども親子で」

や、やがいたのです、と里江は答えた。

「赤子やと。そら、その」

藤右衛門の子ですよ、と柳次は言つた。

「その——子オは」

取られました、と里江は答えた。

「誰に。その、藤右衛門にか」

その親にですよ、と柳次は言う。

「親で、城島屋ゆうことか」

「藤右衛門はこの里江様と離縁してやすからね。次の的を射るのにも、瘤付きじゃあ、まあ何かと拙いでしようや。里江様の産んだ坊ちゃん、城島屋の主の姨の子つてエことになつてるようですよ。つまり——表向きは藤右衛門の腹違エの弟つてことで」

「わ、解らん」

どないな仕組みなんやと剛右衛門は問うた。

「解らねエですか」

柳次は念を押すように尋き返す。

「解るものか」

「本当に解りやせんかい。同じ手口ですぜ」

「同じで、何がどう同じやゆうんや」

「おや。お忘れですか、旦那。じゃあご説明致しやしよう。先ずは——文が来る。恋文ですぜ。一人娘に寄せる熱い思いを認めた、真面目そうな文が届く」

——ああ。そうか。

「調べりや先方は大店で、しかも大層腰が低いや。倅が失礼をば致しやした、ご無礼お詫び致しやす——けれども倅も一途故、想いを遂げさせてやりてエ親心と」

同じでやしよう、と柳次は言つた。

「松野屋さんも迷つたようで。松野屋さんも此方様同様一人娘で、跡取りは居なかつた。でもね、それなら養子に出しても構わねえと、まあこう言う。そこで——一度会つてみた」

「実直そうに見えるのです、と里江が言う。
「逆も善い人に見えます。立ち居振る舞いも、何もかも、そう見えます。でも——」
「二枚目でエ訳じゃあねエ。これで女蕩ししの銀流しってんなら用心の一つもするとこだが、どうも晩稲の坊坊に見えやがる。親の方も礼儀正しく、羽振りも良さそうでね、まあ印象は悪くねエ。いや、商売のことだけ考えたなら——こら良縁でしょうや。ねえ旦那」

剛右衛門は答えず、横目で儀助を見た。

儀助は畳の目を数えるように下を向いていた。

柳次は続けた。

「縁談は纏まった。藤右衛門は肅肅と婿に入つて、まあ松野屋の主も、半ば跡目を譲るようなつもりでいた訳でさね。城島屋と業務提携することで、商いの幅アぐんと広がった。こら良いことづくめでさアね。また城島屋ア、美味しい話をどんどん持って来るンでさ。後ろ盾があるど安心したか、或いは婿の実家に負けじと踏ん張ったのか、松野屋も背伸びして少オし無理な商売を始めた。無理つたつて、博奕じゃあねエですからね、儲ける算段はあつたんだ。ところがね——ここでどんでん返しだ」

そこで、里江は袖を捲つて左腕を見せた。

その腕に。

——兎だ。

いや、蛙かと、剛右衛門はそう思った。

痣である。

それは、まるで月の隈のような痣——否、傷だった。

「藤右衛門は、商売は上手だし外面も良い、傍目から見れば申し分のない亭主でございました。でも、それは上辺だけのこと。女夫の間では——」

「そりゃ酷エ亭主だったようですぜ」

「ひ——酷いとは」

「無理難題を吹っ掛ける、ことあらば難癖を付けて詰る、怒鳴る、殴る蹴るは朝飯前、優しい言葉ア吐いたのは祝言の日だけだったそうでね」

「お、親御さんは何も言わへんかったのか」

「まあ——意見はし難いでしょうぜ。何せ夫婦のことだ。しかも、婿ア大事な城島屋の縁続きですからね」

「と、とはいえやな——」

顔は殴りません、と里江は言った。

「見える所には傷は作らないのでございます。お見せすることは出来ませんが——背中には」

「焼け火箸当てられたそうでね」

「そないなこと——」

「やれ口の利き方が悪い、それ目付きが悪い態度が悪いと折檻だ。反抗すれば余計に怒る。泣きやあ泣いたでまた怒る。告げ口なんかしようものなら——」

解った、解ったと剛右衛門は止めた。

「それは、そういう、その」
否。それは多分。

「計略なんです。それが——仕掛けなんですよ」

「わ、わざとやった言うんか」

「嫌われるために」

「き、嫌われてごないすんねん。婿やど。追い出されるだけやないか」

「追い出されたんで。幾ら隠したって、親御さんが一つ屋根の下に住んでるんですぜ。こら暴露ばれやす。まあ、非道な婿殿に対して、松野屋さんも重ね重ね意見したようですし、話し合いもされたそうですけどね。聞きやしねえ。論ぎそうが叱なぐろうが益々ますます悪くなる一方で、まあそうなりや娘が可愛いやね。親許の城島屋にも話してみたもの。一向に埒わが明かずに結局は離縁てエことに相成った。でもね」

「そうか」

「そう」

献残屋は何故か惨むじたらしい目つきになった。

「夫婦の縁が切れるなら、商いの方も縁切りだど——まあ先方はこう言つて来た訳でさア。ところがその段階で松野屋は、城島屋なしじゃあ身動きが取れねエ状態になつてたんで。いつの間にかそういう、雁字搦がんじめの商い振りになるような運びなつてた訳でしてね」

もう、ひと月と保もちませんでしたと里江は言った。

「悪い噂うわさア足はえが速はやいや。折角の良縁、松野屋の方から縁切りしたたア、世間様は考えやせんからね。事情を説明するにも身内の恥だ。里江様のことを思えば——輕輕かろしくは口くちに出来ねエでしょう」

言い訳も出来やしねえと柳次は言った。

「あの城島屋が倅こに離縁させてまで見切りイつけた相手となれば、評判ガタ落ちア間違いなしだ。どうもあそこはいけねえらしい話にならアね。そうなりや新しい借財は出来ねエし、貸してた金はすぐ返せとなる。ご新規の取引は止めだ。積み込む筈の荷も引き上げだ。でも、そうなつたところで、船の方はどうにも出来ねエでしょう」

それはそうだろう。

そんな恐ろしい状況は考えてみたこともないし、考えたくもない。

「港に船だけぽっかり浮かんで、荷は空っぽで、客も居ねエんですぜ。それでも僅かに残つた荷主の僅かっぱかりの荷のためだけに、無理して船ふねエ出すよりねエ。こらあ大損になる。出さなきゃ出さねエで荷主船主から詐欺呼ばわりだ。あつという間に左前だあね。で——再度また城島屋のご登場とうじやうで」

「商売を引き取ろう、という申し出でした。切れたとはいえ縁は縁、倅の方にも非はあつたらうと、御おん為なごかしの親切な物言いでございましたが——」
里江はいっそうに俯うつむ向むいた。

「それで——乗っ取られたか」

剛右衛門は呟いた。

「そう。それで乗っ取ったんですよ剛右衛門の旦那」
柳次は反復する。

「婿に入つて、女房苛めて、苛めて苛めて、それでお店乗っ取ったんですよ、剛右衛門の旦那」

里江は項垂れている。

泣いているのか。憤っているのか。

「それから先は、前に言つた通りでさ。松野屋の主一家は追い出され、主の息が掛かった者も暇ア出されて、半年後には暖簾も看板も城島屋に掛け替えた。持ち船も借り船も取引先も奉公人も何もかも、全部盗られた」

子供も、親の命もとられてしまいました——。

里江はそう言つた。

そして、

「怨めしい」

と言つた。

「どうえもんがうらめしい」

里江は剛右衛門を上目遣いに見据えた。

「私に我慢が出来ていたらならば、私一人が堪え切れていたならば——こんなことにはならんだ。母も死なず、父も死なずに済んでいた。あの子だつて——藤右衛門は憎かつたけれど、子に罪はないと慈しんでおつたものを、無理矢理に奪つて、私は何もかも失のうてしまった。怨んでも怨み切れず悔やんでも悔やみ切れず、このままでは死ぬに死なれず」

——さとえ。

誰だ、この女。

この女は誰だつただろう。

さとえというなのふこうなおんなを。

「ここまで言つて」

まだ思い出されませぬかと柳次は言つた。

「お、思い出せぬとは——何をや」

「イヤですぬ旦那」

柳次は少し間を空けて不敵に笑つた。

「此方さんが狙われてるてエことを、でやすよ。そこんとこお忘れになつちや、どうもねエや。別にお涙頂戴の不幸話に來た訳じゃあねエ。まったく同じ手口じゃアねエですか。こちらの里江様は——お嬢様の先の姿でござんすよ」

旦那さん——と儀助が言つた。

「こ、この者の話が、ほ、ほんまやつたら」

「本当なら何や儀助。言うてみ」

「で、ですから——」

「考え直せ、言うんか」

剛右衛門は儀助に顔を向けた。

儀助は僅かに面を上げて、怖ず怖ずと剛右衛門を見返した。

「旦那さん」

「阿呆やなお前。見損のうたわ」

剛右衛門は顔を逸らす。

「阿呆——でつか」

「いま話イ聞いておったのやろが。この猷残屋のゆうことが真実なんやったら、敵の策は既に知れとる——ゆうこつちやないかい。手口が判つとって何を畏れることがあんねん」

「いや、旦那さん——」

まだ何ぞ文句があるンかい、と剛右衛門は怒鳴った。

ここ数年、否、十数年、声を荒らげたことなどないように思う。

「儀助、お前は誰や。何者や。杵乃字屋の大番頭と違うんか。大番頭ゆうたら奉公人の天辺やないかい。なら防ぐ策ウ考え。言うたやろ。呑みに掛かつて来たら呑み返せばええのんや。呑み返す手立てエ算段すんのがオノレの役目と違うんかい」

「せ、せやけど旦那さん、お峰様が」

お峰様の一生の話でつせと儀助は言う。

それ身内の話やと剛右衛門は更に強く怒鳴った。

「林蔵かてそう言うたわ。お前と同じこと言うて引いたわな。あの男の方が弁えとるやないかい。身の程を知っておるわ。あの帳屋、慥かに嘘オゆうとるのかもしれない。儂こと騙しておるのかもしれない。しらんけど、それやったらそれでええわ。この杵乃字屋剛右衛門誑ごうゆうのやから、それ見上げた根性やで。それに引き換えお前はどうかじゃ」

儀助は何も答えず、哀しげな目付きで剛右衛門を見続けている。

「オットそこまでだ。旦那、その口振りじゃ、信じて戴けたつてエこつてしような」

柳次が躑つて前に出た。

「そやないで猷残屋」

「違エやすかい」

「オノレなんぞ信用するか、言うとおるのや。その娘かて成り済ましイかもしれへんや。まあ、話聞いた以上は林蔵かて怪しく思えるわな。ま、あんたかて言うておったやろが。オノレ等ア同じ穴の狸や」

天秤掛けさして貰うわ、と剛右衛門は言った。

「ま、それならそれであたしや一向に構いやせんぜ。要は旦那ア——城島屋と一戦交える気だきやアある——ツてエこつてしように」

旦那さん、と儀助が言う。言い切る前に当たり前やと剛右衛門は言った。

——ほんとうに。
それでいいのか。これが自分の真情なのか。
何か考へるべきことはないのか。大事なことを忘れてはいないか。どこかで間違えてはいないか。儂は——。

「林蔵の言う通りなら何も憂えることないわ。この柳次の言う通りやったら闘うまでや。そやる。ええか儀助、この柳次はな、相手が悪やさかい止めや、言うるとると違うんやで。悪やさかい潰したつてくれと、こう言うとのんや。そやる」

へえい、と柳次は低い声で答えた。

「ええ話やゆう林蔵は何や煮え切らん。反対に、あかん話やゆうて来た柳次はやつてくれと言うわ。こらどういふことか解るか儀助」

普通は逆やと剛右衛門は言った。

そんなこと思つてもいないのに、口から理屈が流れ出る。

「林蔵が儂イ騙そ思とるんやったら、こら諸手を挙げて勸める筈や。そやる。実はあくどい縁談の相手紹介して旨い汁啜ろう企んだのやつたら、あの口の上の男や。なんぼでも言いようがあるやろ。そして、この柳次が儂イ騙そ思とるんやったら——そらつまり城島屋ア悪やないゆうこつちや。せやったら、今の話は嘘八百ゆうこつちやな。ほなら、此奴ア止めて言う筈や。縁談壊すために嘘並べ立てたゆうこつちや。でもこの男は勸めよるんやで。こら、思惑は別にして、どつちやもほんまのこと言うとする——ゆうことやる」

そうだ。そうなんだ。

「旦那さん、そらそうかもしれんが、そらつまり」

「もうええわ儀助」

剛右衛門は立ち上がった。

「柳次。それから——」

さとえ。

「あんたさんの願ひは、城島屋にひと泡噴かせることなんやな。ま、あんたの思い通りになるかどうか、そら何とも約束出来んで。こればかりは判らんこつちや。勝負ゆうんは蓋ア開けてみるまでは——」

剛右衛門は障子を開けて——。

月を仰いだ。

肆

また月イ見ておらるるなアと林蔵は言った。
慥かに剛右衛門は月を見ていた。

向月台に上るなら自然に見上げる。そうした習慣になっている。

「命が縮むンやったかな」

「縮みまつせ」

「どのくらい縮んだかな」

「さてねえ」

林蔵は横に並んで、街並みを見下ろした。

「上方ア豊かや」

林蔵は感心したようにそう言った。

「私はね、旦那はん。一昔前、少しぼっかり江戸に居たことがあるんですわ。あの江戸ゆうところはせせこましい土地でつせ。地震いは起きる雷さんは落ちる、おまけに火事は多い。家エ建てても建てても潰れるか焼けるかしよる」

「火事は江戸の華とかゆうのやろ」

強がりですわ——と林蔵は言う。

「江戸の街は安普請でつせ。どうせ壊れることが判つとるし、類焼防ぐためもあるよつて、わざと壊れ易い平屋アおつ建てるんや。櫓樓でつせ。水路で仕切るンも火の手収めるためや。濠やら川やらあるよつて、水気が多い。それで水捌けも悪いと来た。江戸者は粋やゆうけど、貧乏臭いだけや。それがどうや——」

上方は潤うとる——と、林蔵は続ける。

「足許オ見てみなはれ。家並みが立派や。江戸は武家屋敷が多いけども、構えが大層なんは偉いお方のお屋敷だけですわ。後はカスでつせ。ま——」

林蔵は天を見上げた。

「上エ見とる分には江戸も大坂も変わりまへんけどな」

「そら——変わらんやろ。こないだお前さんも言ううとつたやないか。唐天竺かて浮いとる月は同じなんやろ」

「同じやろね。けど——旦那はん、いつやったか言うておられたやないですか。上エ見ずに梯子上る阿呆は居らんとか」

「言うたかな」

「先日は、僕は倅せやとも言うてた」
倅せやでと剛右衛門は答える。

「今もでつか」

「何言うのや林さん。この前会うてからまだ十日と経ってへんやないか。儂どこは何も変わってへんわ」

「何も変わってまへんか」

林蔵は低い声でそう問うた。

「変わってへんで」

「けど旦那はん——」

上ばかり見てはるやないですか——と林蔵は言った。

「梯子上る氣イになつたんでつか」

「ん」

——そうか。

そうかもしれぬ。儀助があんなでは、当分隠居は無理である。

「林さん、一つ尋ねたいことがあるんやがな」

「あんた儂イ謀つとるか、と剛右衛門は尋いた。

「私が旦那はんを謀りまつか」

「城島屋の悪い噂ゆうのを聞いたで」

「ああ、そのことですか」

「そのことどう言うこつちや。矢つ張りお前はん知つておつたのやな」

知つてましたでと林蔵は何の銜いもなく答えた。

「さよか。せやつたらお前さん、城島屋と組んでこの杵乃字屋ア盗る氣イやつたかな」

「阿呆なこと言うたらあかんわ」

林蔵はゆるりと手摺りに乗り掛かり、また下界を見下ろした。

「密屋林蔵は旦那はんの味方やで。銭貰とるやないですか。私は慥かに口先で世才渡る半端者やけどもね、客ウ裏切るような下衆と違いますわ」

「なら何で黙つておつてん」

関係ないことでつしやるがと林蔵は言った。

「関係ないことあるか」

「いや、関係ないわ。私は商いに手エ貸すのが仕事やさかい、この度のことも商売筋やと割り切つてますねん。実際のところ城島屋は仰せの通り一筋縄ではいかん相手や。せやけど遣られつ放しで済ますことはせんわ。この林蔵が咬む以上——」

勝算がある、ゆうことかと問うと、ありますわと林蔵は答えた。

「相手にとつて不足はないわ。ええですか旦那はん。普通の取引先イ呑んで掛かるような商いすんのは、こら奨められまへんわ。せやけど仕掛けられたら仕掛け返すんが常套や。城島屋は必ず仕掛けて来る相手や。つまり打つ手次第で吞める相手や、ゆうことですか」

それを含みでええ話やと申し上げたまで——。

林蔵はそう言つて剛右衛門に向き直つた。

「城島屋ア吞めれば、この杵乃字屋の身代は五倍に膨れまつせ。旦那はんと私が組めば、こら難し話と違えますわ。せやから——何も言わんかっただけです。仮令相手がカスやろとワルやろと、儲け話に変わりはない。商売だけ切り取るンなら、そんなことは関係ないんや」

こらええ話なんでつせ、と林蔵は言つた。

剛右衛門も——同じように考えたのだ。

「違いまっか旦那はん」

「違わんやろな。だが、その割りにこないだのお前さんは、煮え切らん様子やつたがな」

「生煮えなんは商い以外の話ですやん。なあ旦那さん。屑でも悪党でも、喰つたる思えばええ餌になるんや。せやけど、婿に取る亭主にするゆうのは、これ別物ですやろ。カス擱まされるんはお嬢はんや」

お確かめんなりましたかと林蔵は問うた。

「確かめて——何を」

「勿論お嬢はんのお気持ちですがな。旦那はん、そのご様子やと、あの城島屋藤右衛門の遣り口イ——お知りなられたんですわなあ」

「そや」

「酷い話ですやろ。で——お嬢はんは何と」

話していいない。何も伝えてはいない。それ以前に言葉を交わしていいない。ここ数日は顔も合わせていいない。そう言つた。

「話されて——まへんか」

林蔵は何故か哀しそうな顔をして、暫く黙つた。

それから顔を天に向けた。

「何故——お話しにならんかったんです」

「何故やろ。どうも娘の顔を見るンが——」
辛かった。

どうしてだろう。

「縁談が進んどるゆうことはご存じなんでつしやろ」

「そら知っておるやろ。下の者は兎も角、奥ウ出入りしとる者は皆知つとおることや」

「大番頭はんは何か言うてまへんでしたか」

あれは駄目や——と剛右衛門は吐き捨てるように言つた。

「あんたア褒めてくれたし、儂かて頼りにしておつたんやけども、今回ばかりは、もう腰が引けてしもて——」

お嬢様の——。

お嬢様の気持ち——。

「寝言みたいなことばかり吐かしよる。商売のことが頭に入ってへんのや」

「それやったら」

何が入つてるんやろと林蔵は言う。

「頭やのうて、胸ン中に一物あるンと違いますか」
 「さあ、ただの臆病者や思つて。城島屋ン手口を彼此聞いて、びびつてもたんと違うか。商売ゆうのは時に非情なものやさかいな。無常な心持ちンなつてまうこともあるけども、それでも情け捨てなくなる程の勢いゆうのはあるやる。その勢いに吞まれたら負けや。あれは吞まれてもうたんやな」

慥かに城島屋の手口は褒められたものではない。悪辣である。人倫に悖る、商道に外れた行いであるかもしれぬ。だが、人生の濤は、偶か人を鬼にする。鬼になるよりない大波に乗った時は、鬼とならねば溺れてしまうものである。

剛右衛門はそう思う。

否、ずっとそう思つて来た。

儂は負けんとど剛右衛門は言つた。

「つまり——旦那はん、城島屋との縁談進めるおつもりなんですか」

「そのつもりや」

約束や、仲継いで貰おかと剛右衛門は自らに言い聞かせるようにそう言つた。

「林さん。儂はな、お前はんを信用すんのは止したわ。止したけども、お前はんと商売はしたいわい。何企んでおるのは知らんけど、城島屋と儂と、どつちやに商才があるかどつちやに付くのが得なんか、そらお前やつたら判ることやる。お前が付いた方が勝つ——儂はそう思うとる。だから、好きに動いてくれてええで」

そこまで肚を括られたんだったか、と林蔵は言つた。

「ええんですね。お嬢はんの気持ち、大番頭はんの気持ち確かめいで——進めたつて」

「諄いがな」

「どうなつても知りまへんで」

林蔵は下を向き、三白眼になった。

「凄むやないか。そら何か、情け心オ出しておんのんか、林さん。気にせいでええで。儂は平気や」

「そら——」

旦那はんは平気でつしやるな——と言つて、林蔵はくるりと背を向けた。

林蔵の頭の上に月が輝いていた。

「ほんまにええんですな」

「念押すやないか。ええたらええわ」

「さよか」

林蔵は低い声でそう言つた後、急に口調を変えた。

「ま——今のお話のご様子から察するに、旦那はん、大方あの六道屋の浮かれ話でも聞かれたんでつしやるな」

「聞いたで。詳しゅう聞いた。城島屋に喰いものにされたゆう女にも、会つたで」

「はあ」

林蔵はゆるりと振り向く。

「旦那はん。そら、松野屋の里江はんと違ひますか」

「さとえ——」

そう。

そんな名やつたと剛右衛門は答えた。

「さよか。お会いになつた。里江はんに」

「会うたわ」

「里江はんゆうたら」

もう死んでますわ——と、林蔵は静かに言った。

「死んだやて。阿呆吐かせ。いつ死んだ。会うたのは昨夜やで。今日になつて首でも縊つたゆうんかい」

「いいや」

里江はん死んだんはもうずっと先のことです。

「先で」

「あの人は可哀想なお方や。まあ、ご本人からお聞きになつたならご承知やろけど、亭主に酷い目エに遭わされてなあ。襤褸襤褸ンなつて、自分の生まれ育つた家追い出されてしてもなあ。おまけに、お子まで取られてしまひましたん」

「ぎ、聞いたで」

「お母はんは病死、お父はんは首イ吊つて軒に下がつてなあ。里江はん、苦しゆうて哀しゆうて、喉オ突いて自害されたんや」

「う、嘘や。そやつたら昨夜の——」

あれは。

「あんな旦那はん。六道屋の柳次ゆうのは、ただの献残屋と違ひますのや。あら口寄せや」

「口寄せて——何や」

「市子みたいなもんでつせ。あの男は、古い物、曰くのある物オ扱ウンが生業やけど、扱ウンはそれだけやないのですわ。古い魂、曰くのある霊も扱ウ。あら輪廻し損ねた死人が迷う、六道の辻の物売りなんですわ。せやから六道屋ゆいまんねん」

「そんな話——」

ほんまでつせと林蔵は言う。

「あの男は、二ツ名を浮かれ亡者の柳次——ゆいましてね、死人をうかうかと現世に誘ひ出しちゃあ、踊らせるンが得意の業なんや」

戯けたこと語るなど剛右衛門は怒鳴つた。

「じよ、冗談が過ぎるわ林さん。あのな、儂はこの眼で見たんやで。この耳で聞いたわ。あの女はちゃあんと居たわ。幽霊やない。夢でも幻でもない。下の、儂の座敷に座らして、言葉交わしたんやから」

あの女が死んでゐるなら——。

「儂の目エは節穴やと言うんか」

「節穴やね」

「何やと——」

「旦那はん。何度も尋きまつけどな、その女、名前は何やった。どんな顔やった」

「な、名前は」

さとえ。まつのやのさとえ。

まつのやのむすめ、さとえ。

「松野屋の里江——」

「そら死んでますやろ、」

「え」

「死んでますやろが旦那」

「な、何を」

「そら二十二年前に旦那はんが苛め殺した女の名前と違いますのんか」

それは。

「この店が杵乃字屋になる前の屋号は松野屋とゆうたのと違いますの。その一人娘は里江ゆうたのと違いますのか。奉公して三年で大番頭にまで昇り詰め、その娘娶ったんは旦那はんと違いますのかい。添った後苛めて苛めて、元の主ごと此処から追い出したんは、旦那はんとうんかい」

「さ——さとえ」

「そやつたら、その里江はんは疾うの昔に死んでるやないかい。旦那はんがお峰はん奪い返したその翌日に」

喉才突いて死んでるやないかい。

忘れてしもたんかツと林蔵は言った。

さ、里江。

あ、あの顔は。

あの顔は里江の顔だ。

「鬼なる勢いゆうのは、慥かにありますわな、旦那はん。紀州から流れて来た崩れ馬喰だつたあんたア、松野屋はんに拾われて、一から商いを仕込まれて、初めて己の商才に気付いたんでっしやろ。その才覚買われてとんとん拍子に出世して、婿に入った。跡取りと決まった途端に、あんたア、そらあ働いた。働いて働いて——」

鬼になる勢いを呼び込んだ。

「あんたア商売が面白うて面白うて堪らなくなつたんですやろ。そうなる——邪魔なんは主や。人がええだけで商売回してたような前の主は、あんたの商売には邪魔やった。放つといたつて跡目は譲られるいうのに、あんたには待つことが出来ひんかつたんや」

そう。

あんなぼんくらは。

要らん。腰が引けとつた。寝言みたいなことばかり吐かしよる。商売のことが頭に入つてへんのや、あの——。

——松野屋善助ぜんすけゆう男は。

「そこで——あなたは追い出したんや。里江はん苛めて苛めてイビリ出したんや。ほんまやつたら出て行くのはあんたや。でも、もう松野屋はあんたなしじゃあ回らなくなつとつた。そうでんな」

「そ、そや。奉公人かてどつちや取るかゆうたら迷いなく儂や。決まつておるやろが。あの腰抜けと儂と、どつちやに商才があるか、どつちやに付くのが得なんか、そないなことは阿呆でも判ることちや——」

——乗つ取つたのは儂やつた。

「せ、せやけど、あの、あの女——」

「女房ごと主イ追い出して後釜あしがまに坐り、他のお店と縁組みして商売大きゆうして、それで飽き足らずにその店まで乗つ取つて——あんた遣りたい放題やつたんでつしやる。でも、お子には恵まれなんだ。せやから里江はんから、お峰はん奪い取つたんやろ。何もかもなくした里江はんは、喉才突いて死んだんでつしやる。違いまんのか」

後腐れなくてええわ、そう思つたのでつしやる。

里江はん——。

「死んでるやないですか」

林蔵が、何故かぬうと大きくなつたように見えた。

「あんたが殺したんやで」

何を忘れてるんやあんた。

何もかも忘れて、それで終しまいか。

満ち足りておるゆうのんか。それで。

それでええのんか。

「あんた一人倅こせんなつて、そらまあええわ。それも己の才覚やさかいな。せやけど剛右衛門はん、忘れてしまつてええことと——」

悪いことがおまつせ、と林蔵は言つた。

剛右衛門はがくりと膝ひざを落とした。

見上げると、林蔵の肩越しに真ん円まゝの月が浮かんでいた。

「こ、この度のことは、り、林蔵、この」

城島屋なんて店は尾張にはないで、と林蔵は言つた。

「な、ないて」

「城島屋ア、あるとしたらあの」

林蔵はず、と右手を挙げ、背後の月を指差した。

「黄泉の国と違いますか」

「ど、どういふことちや」

「忘れたんでつか。城島屋ゆうたら、あんたが十年前に潰した泉州の船問屋やないですか」

「つ——」
潰した。

「あんたに喰われて一家離散や。もう誰も彼も縁者は皆死んでしもたわ。そこが扱った船だけは、まだあんたのどこにあるけどな」

儂が潰した店や。

「ええか。あんた、その亡者の店と縁続きになりたいゆうて、わっしに仲継げと、ついさつきその口で、瞭然と言ったんでっせ」

継いだるわい、と林蔵は言った。

「あの世の亡者と繋ぎとつたる。約束やさかいな。存分に亡者と張り合ったらええがな。亡者喰うたれや」

「ま、待て」

待ってくれと剛右衛門は手を翳す。

指の隙間に月輪が覗く。

「あんたが選んだこととっせ。わっしは何度も何度も確かめたやろ。それでええのんか、何ぞ忘れてはおらんかと。この道は——あんた自身が選んだ道や」

林蔵の指は月を差している。

死が支配する、静寂な球体を指し示している。

「ええか。あんたが昔を思い出す機会は幾度となくあつた筈やで。城島屋ゆう名前でも、松野屋ゆう名でも思い出せたやろ。城島屋の手口かてあんたの爲たことやで。乗っ取つたの潰したの、ほんの少しでも思う処があるのやったら、なんぼでも思い出せたやろ。せやけど、あんた何ひとつ思い出さんかつたんや。里江はんに会うたかて、顔見たかて思い出さんだやろ」

——里江。

「能く聞きなはれ剛右衛門はん。誰も償えとは言うてない。今更何をしたかてどもならん。死んだ者は還らんし、過ぎた昔は戻らんわい。償うことなんぞ金輪際出来んで。ただ、ただ」
思い出せ。

「あんたに泣かされた者、潰された者、そして死んで行った者どもがな、自分等を忘れてくれと、そう言うてるだけなんや。お前の今の倅せは、俺達の屍の上にあるんやと、オノレのふかふかの座布団の下にはオノレに負けて泣き乍ら死んで行った者の骸が山とあるんやと、それを忘れんでくれと——」

亡者どもがそう言うて泣いとるだけや——と、林蔵は謡うように言った。

「あんたが思い出してさえいれば——この縁談は断つた筈やろ。いや、昔のこと悔いて断るゆうんやないで。あんたの大事な、大事な筈の娘さんが、あんたが里江はんにしたのと同じ仕打ちを受けるかもしれないやで。自分がどれだけの爲たのか解つておれば——それは避けるで。結局、あんたはお峰はんのことも眼中になかったゆうことやろ。あんたは、杵乃字屋剛右衛門は、自分のことしか頭にない、そういうこつちや」

「わ、儂は」

「あんたはこつちの道を選んだんや」
月光が。幽なごけき死んだ光の月光が。

——眩まぶしい。

「剛右衛門はん。あんたの目エは、ほんまに節穴やつてんで。あのな、あんたの前に現れた里江はん、あれは」

お峰はんやで——。

お峰。

「ほ、ほんまか」

あれが。

「う、嘘や。い、幾ら何でも実の娘見て——」

あんな間近に見たというのに。

「わ、判らん訳が」

「判らんかったんやて。あんたは」

「ほ、ほんまなんか。あ、あれは」

里江だったんやないのんか。

いや、あの顔は。

「さ、里江やった」

「そら似ておるわ。親娘やもの。似ていて当然やないか。来る日も来る日も、それこそ二十何年もお峰はんの顔を見て暮らしとつて——や。あんたただの一度も里江はんのこと——思い出したことはなかったんか」

そんなら、そら見てなかったのと一緒やで。

「あんたは一緒に暮らしとる娘の顔すら見んで生きて来たんや。あんたお峰はんのこと何も知らんやろ。お峰はんはな、まだ幼い時分に、死んだ母親の真実を知ってしもたんや。父親に乱暴され追い出され、喉突いて死んだてな」

「お、お峰が——」

知っていたというのか。

「それだけやない。儀助はんかてそうやで。あの人はあんたが潰した泉州の城島屋の、ただひとり生き残った——次男坊やで」

「な、何やて——」

それじゃあ。

「こ、こら全部、彼奴あいつの、い、意趣返しあやの仕組みか」

違ちがうわい——と林蔵は厳しい声で言った。

「勘違いしたらあかんで。やられたらやり返す、喰われたら喰い返す、世の中あんたみたいな人ばかりと思たら大間違いや」

「で、でもあれは、身分を——」

素性を隠していたやないか。

「当たり前やろが。そうと知って、あんた雇うか。いや、儀助はんの方はあんたがそれを承知で雇うてくれたのかもしれない——何処かでそう思うてはおったようやけどな。そら買ひ被りやったな。あんたは何も判つておらんだけゆうことや。そやろ」

そんな度量はなかつたようやなと林蔵は言った。

「あんたの眼鏡は曇つとるで。商売以外のことは見えんのか。儀助はんはあんたのこと爪の先程も怨んでなかつたわい。寧ろ尊敬しとったわ。親の店が潰れたんは時の運、延いては運を呼び込む才覚がなかつたからやと、殊勝に考えとった。昔のこと綺麗さっぱり水に流して滅私奉公しとったんや。あれは見上げた男やで。でもな、それでも我慢出来ひんかつたんや」

「我慢——て」

「商売のことでも私怨のことでもない。お峰はんのことや」

「お峰が——何で関係ある」

「大有りやて。儀助はんはな、お峰はんの煩悶すんのを見てられへんようになったんや」

「な、何でや」

「あんた、一つ屋根の下に暮らしておつて判らんかつたんか。あの二人は」

好き合うておるのやで。

「お、お峰と儀助が——」

そうだったのか。それで儀助は。

「せやから節穴やゆうとんねん。あんた、ええ婿とええ娘持つて、ほんまに、ほんまに倅せやつてんど。それがどや。一度でも儀助はんと肚割つて話しとつたら、お峰はんの気持ち汲んどつたら、こんなことにはならなんだのやで」

「こんな——こと」

林蔵はもう一度月を指差した。

剛右衛門はその指の先を見上げた。

「月ゆうのはな、剛右衛門はん。兎でも蛙でもありまへんで。あれは見る者によつて見え方が変わる——鏡や」

「かがみ——」

「己の姿を映す鏡や。あんた、周りを見ずに己の姿ばかり見ておつた。あんたの目エにはあんたしか映つておらんかつた。せやから目が曇る。曇つて世間が何も見えておらん」

「お、おのれの姿——」

「そやろ。お峰はんはあんたのこと案じておつた。儀助はんかて同じや。最後の最後で、あんたは人としての道選んでくれるやろと、そう信じておつたんやで。あんたが縁談断つてくれたら、もう何も言うまい、母親のことも何もかもなかつたことにして今まで通りにしよ、お父はん隠居させて、儀助はんと所帯持つて、末長く倅せに暮らそうと——お峰はんはそう思つていたのや。なのにあんた、口も利かず相談もせず、慮ることもせず、顧みることもせなんだんや。今の、今のオノレの顔ばかり鏡に映して、そればかり見続けておつたんや」

「わ——儂は」

「桂男はあんたや」

「儂が——」

映つておつたのかい。

「桂男やったら罰を受けて貰おか。刈つても刈つても刈り切らん、大樹の枝でも伐つて貰おかないな。あのな、儀助はんとお峰はん」

二人は大坂を出たで、と林蔵は言つた。

「出たて——」

「駆け落ちや。当たり前やな。亡者と縁組みさせるような親の許には——居られへんやろ」

「お峰——」

剛右衛門は立ち上がり、向月台の縁を掴んで下界を見渡した。

街が。家並みが。家が家が。

「お、おみねッ」

「漸く下ア見よつたな。でも、もう遅いで」

「お、遅いんか」

「遅いやろな。昨晚の六道亡者の浮かれ踊りで、二人はあんたに見切りイつけたんや。あんたは大事な娘と、信頼でける商売の右腕エ失うたんや」

「お、お峰。儀助——」

あんたが選んだ道なんやで、と林蔵は言つた。

「道筋はつけたつたやろ。ナニ、あんた満ち足りておるのやろ。蔵も六つもあるのやろし。屋敷かて無駄に広いのやろし。申し分ない倅せなんやろ。別に命取ろうとは言わんわい。金も取らんわ。でもな、あんたはもう亡者やで。これから銭の亡者にでもなつて、いつそうあくどい商売するくらいしか——道はないで」

剛右衛門はゆっくりと月を見上げた。

滲んだ月輪が、蠢いている。桂男が招いている。

あの桂男は——。

儂やつたんか。

「これで終いの金比羅さんや」

林蔵はそう言うと踵を返し、軽く振り返つて、

「せやから月ばかり見てたらあかんで言うたやないか」と、結んだ。

後

あの業突張りどないなつたのん、とお龍が問うた。
どうもならんわと林蔵は答えた。

「あのままや」

「それで——ええの」

ええて何やと林蔵が問うと、怨み辛み晴れてないやないの、とお龍は言った。

「怨み晴らすてどないすんのんじや。そんなもん、甚振ったかて殺したかて晴れるもんと違やろ」

「そらそうや思っけど、店潰したるとか」

仕返し仕事と違うんやで、と林蔵は言う。

「一文字狸への依頼は、あくまで剛右衛門の性根を見極めることやってんで。剛右衛門懲らしめやなんて依頼は受けてないわ。それやったらもつと簡単やないか」

ややこし仕事やで、と林蔵はぼやく。

「ま、霧船乗せて、高い高い処へお連れしたつたわ。それでええやろ」

「どうええの」

「あの男はな、もう生涯、倅せやなと思っけたアないんやで。錢稼ごうが蔵建てようが、美味いもん喰おうが女抱ごうが、彼奴は死ぬまで倅せな気持ちにはなれんやろ。一生満ち足りずに暮らすんやで」

何よりも重い刑罰だろう。

怖いねえ霧船は、とお龍は言う。

「生き乍ら亡者の船に乗っちゃまうんだ」

好きで乗せる訳じゃねえやい、と林蔵は言った。

林蔵は、ただの帳屋ではない。二ツ名を霧船の林蔵という、小悪党である。霧船というのは、比叡七不思議の一つ、死人が操る亡者船のことである。琵琶湖に浮かぶその船は、霧に紛れ霞に乗って、いつの間にか比叡の山に上るのだと伝えられる。

口先三寸の嘘船に乗せ、気付かぬうちに相手を彼岸に連れて行く——その林蔵の遣り口を、比叡の不思議に擬えた訳である。

林蔵は、絵草紙版元の一文字屋仁蔵からこうした狂言仕事を請け負っている。浮かれ亡者と猷残屋の柳次も矢張り一文字屋の身内の一人である。柳次は、死人を恰も生きてるように見せかける死人芝居を得意とする、質の悪い小悪党なのである。

「でもなお龍。あんな酷い縁談、普通は断ると思うやろ。この度はわつしの最後の出番はなしや、六道の浮かれ亡者で暮やろと、そう思ってたんやけどな。まあ——」

業が深かったのか。
矢張り目が曇っていたのだろう。

「娘さんは——哀しかったやろね」
「そやな」

「お母はんに化けはったんやろ」
矢つ張りうちが代わったたら良かったやろか、とお龍は言った。

お龍は、化ける。小娘から老婆まで、どんな女にも見事に化ける。柳次と組んでの幽霊芝居はお手の物である。

「なあに。ええんや」

あの娘は——。

母親の幽霊役を自ら買って出たのだ。

母子なのだから当然似ている。柳次も化けさせ易かっただろう。

否、似ているという以前に、騙すのは実の父親である。目の前で顔を晒せば気がつくだろうと、お峰はそう思ったのだろうと、林蔵は睨んでいる。

でも、目の前で見ても判らなかつたのだ。

目を曇らせるにも程がある。

「ま、そういう訳で、目出度し目出度しゆう訳には行かんかつたけどな。これで終いや」
終いやねえ、とお龍は言う。

「駆け落ちした二人はどうしてはるの」

「何をごしゃごしゃ尋くねんな。そないなことわいが知る訳ないやろが。あんな、わいの仕事は引導渡したら終いなんやで」

林蔵はそう言うのと立ち上がり、店先に笹竹を立てる。

「何や、もうここに店出すんは終いなんやないの」

「気に入ったよつてな、も少し此処に居るわ。次の仕込みまではまだ間があるやろ」

大坂は性に合う。

ふうん、とお龍は生返事をした。

「それよりあの二人——何処に行かはったのやろ」

「気にするやないか。ま、六道の手引きやから、奇つ態なところかもしれんな。でも心配はあらへん。あの儀助ゆうのは、中中どうして確乎り者やで。十年奉公して結構小金貯めとつたんや。当面の暮らしには困らん」

その虎ノ子全部取つてもたんやないのと言つて、お龍はけたけたと笑つた。

「取るかい。取つたゆうなら、そら元締やろが。わいもお前も請負仕事やろが。寝惚けるんやないで」

「そう言わはるけど、あの剛右衛門からは取つてたやないの。指南料とか言うて」

「そら仕方がないやろが。六道かて皿やら鉢やら売りつけてたやろが。あの実入りは別勘定やで。ま、もう少し取つたつても良かったと思うけどな」

幾いくらもちろ個ち貫かんうてたんやろねえと言って、お龍は土間に跳はび降り、ほなら親方に報しりせて来るわ、と言いった。

お龍が軒を抜けようとしたその時。

ざあと雨が落ちて来た。

いややわと引き返す。

「濡ぬれてしまうわ。今日は降らん筈はずなのに」

お月はんは澄しんではったやん——とお龍は言う。

心の月には確か乎かり量かが掛かかっつたわい。

林蔵はそう呟つぶやいて、苦笑くせういをした。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎ご注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。